「おい。ずつと此處に居た？」

女は吃驚して眼を上げた。男は未だ微笑みながら赤ん坊の寢顔を見て、

「ねんねかい？　ふうん。……風を引かせないやうにしてやれよ」

女は、矢張り空虛な眼をして默つたまゝ見上げてゐた。

「おい、どうしたんだ。氣分でも惡いのか」

男には、妻のその氣を失つたやうな態度から、その氣持はよく解つてゐた。ふとすると自分も、と、元氣を裝つてゐるだけ、心細い氣がした。

「どうしたんだよ。別れる時にそんな變な顏をしてくれるなよ。よ、ほら笑つた。ほら〳〵……」

男は、妻の頰を人指し指で、こつ〳〵と突きながら、子供をあやすやうにわざとおどけて見せた。しかし、妻は、薄く涙を浮べたまゝ、矢張り微笑まうともしなかつた。

「危いじやないかッ」

つつけんどんな言葉が、何故かしら又してもその男の耳に甦つて來た。男は又急に笑へなくなつて妻のその淋しい顏を見てゐると、折角薄らぎかゝつた忘れよう、忘れようとしてゐた氣持に、ずる〳〵と引擦り返されるやうな堪らなく腹立たしい心になつて行つた。

「勝手にしろ。別れる時に泣顏なんかしたりする奴があるか！」

男は、自分でさう云ひながらも、矢張り同じやうに涙組ましい心地にぐん〳〵と引擦り込まれて行つた。丁度、蟻地獄の中へ落ちた小動物のやうに、落ちまいとすればする程、ずる〳〵と深味へ落ち込んで行くのであつた。

妻は何か云はうとしてゐるらしかつたが、たゞ脣をぴり〳〵と顫はしたばかりで何も云はなかつた。

「もう切符を切るから、わざ〳〵入場券を持つて來てやつたのに。勝手にしろ」
男はさう云つて、今にも、妻が何とか云ふかと心待ちに待つてゐた。
(同じことなら、思ふだけ抱き付いて泣いてくれるといゝ)
男は、堪らなくいら〳〵とした手付で、持つてゐた入場券を妻の膝の上へ置いた。
「皆が待ち草勞れてゐるだらうから、もう行くぜ。子供だけは大切にしてやれよ……」
男はさう云ひながらも、今にも妻が自分の胸に縋りついて泣き出すかと待つてゐた。
が、女は矢張り默つたまゝ俯向いてゐた。立つてゐた男には見えなかつたのだらうけれども、女は膝の上の入場券を見詰めたまゝ、ほろりほろりと涙を落してゐたのだ。
男は、妻の默つてゐる姿と、撮み上げたやうな鼻を見せて眠つてゐる赤ん坊とを等分に見詰めてゐると、どう云ふものか、
「危いぢやないかッ」

と云ふ言葉が又しても、しつこく耳に浮んで來た。そして到頭行くところまで來たやうな堪らない心地になつて、
(畜生ッ!)
と口の中で叫びながら、くるりと妻と子とに背を向けると、その儘すた〳〵と出て行つた。

「下り、下關行……」
通りすがりに、驛夫がもう一度さう云つて覗いて通つた聲に、あの儘、膝の上に入場券を置いてぼんやりと俯向いて座つてゐた、ひきつめに結つた女は、ふと氣が付いて顏を上げて見た。
つい今しがた迄、この室一杯に集つてゐた人々は、何時の間にやら、殆んど出て行

つて了つて、たゞ足元の薄暗いアスファルトのあちこちに紙屑や密柑の皮などが轉つて、がらんとなつてゐた。そして天井の電燈ばかりが、白々と輝きを增してゐるやうに思はれた。

（遲くなつた）

女は、自分でも解らなかつたが、たゞ夢中になつて膝の上に置いてあつた入場券を握つた。

狼狽て待合室を出てホールへ行つて見ると、改札口は、がらんとしてゐて、たゞ改札掛が二人パンチを握つたまゝ寒さうに立話をしてゐた。

女が出て行くと、その一人が冷たく光るパンチを擧げて招いた。

「早く、早く！」

女は片手を後へ廻して、背の子供を押へながら、狼狽て駈け出した。

「早く行かないと發車しますよ」

長い顏の驛員は、入場券を切りながらかう云つた。

（遲くなつた）

女は夢中でプラットフォームへ駈け上つて行つた。

「おい。あつたかい？」

窓の外で叫んでゐるものがある。

格子縞の鳥打帽を被つてゐる入營者は、今やつと自分が間に合つて得られた空席の茶色のクッションを見下して、宜くまああつたものだと、殆んど夢心地で、しきりに乘口で亂れた着物の前を合してゐた。

見送人の先頭に立つてゐた自分が、改札を濟せると、我第一に駈け出した。乘口では

二三度デッキのてすりを掴みそこなつたが、人波を押してゐるうちに、やつと踏段に足がかゝつた。と同時にもうあとは夢中だつた。

「おい……。あつたかい？」

もう一度窓の外でかう呼んでゐるのが聞えた。男は、それを初めて耳に入れると、聞き慣れた町内の幹事の聲だなと、狼狽て窓ガラスを落した。

「うまくあつたかい？」

「御蔭樣で……」

「そりや結構だ」

さう云ひながら、外からバスケットを入れて呉れた。

「おい、一寸、一寸……」

と、バスケットを網棚へ上げてゐると、もう窓の外から又呼びかけられた。

「……あちらへ着いたら、直ぐ禮狀を出さないと駄目だぜ。忘れないやうにな」

もう大分禿けて、頭の地が、てか〳〵と赤く光つてゐる幹事は、さつ云つて了うと自分の用事はそれで濟んだと云ふ風にさつさと窓際を離れた。

すると、その後から、一人一人眼まぐるしい位の人々が、代る代る身體の事や、車中の事や、船の事を口早に云つては握手をしてのいて行つた。

男は、ほんやりとそれらを聞き流して手を差し出しながらも、食ひ付くやうな眼をして、搖れ跳つてゐる人々の頭越しに、妻の姿を探してゐた。しかし、その雜沓の中の何處にも、子供を背負つた女らしい姿は、一人も見えなかつた。

（來なかつたのか知ら、あの儘……？）

男はふと眉をしかめた。――傘も持たないで、妻はだゝつ廣いステーション前の道を力無く歸つて行く。道の西側にアーク燈が青く冷たい色をして輝いてゐる。その光

に、飾はれるやうに落ちて來る粉雪が鋭くきら〳〵ときらめく。その中を妻は、ひきつめに結つた頭を垂れて、しよぼ〳〵と歩いて行く。可哀さうに、背の子供の仰向いた寢顔の上に、刺すやな粉雪が、要捨なく降りかゝつてゐる。

「おい。雪がかゝるから、もう身體は入れたらどうだ」

禿頭の幹事の聲が突然した。

氣が付いて見ると、窓からさし覗けてゐる彼の頭や首の上へ、少し前から、降り出した雪が、しきりに落ちかゝつてゐた。

「いゝえ、大丈夫です……」

と云ひながらも、急に氣羞しくなつて、一寸首を引込めると、何だか後で誰かゞ笑つてゐるやうな氣がしたので、ちらと車内を振返つて見た。

男は、振返ると、いきなり一つごひんと、ぶん殴られたやうな氣がした。

何時の間に來たのか、自分の直ぐ後に、あの待合室の入口で娘に衝き當つた時に怒鳴り付けた鳶色のオーヴァを着た男が、もう坐る席が無いらしく、ぼんやりとこちらを向いて立つてゐたからであつた。

男は妻が見えないために、次第に膨み切つた腫れもの〻やうにふくれ上つてゐた心の中の不滿が、その男の顏を見ると、針で突かれてはち切れたやうな心地がした。

「もう發車しますから、お見送りの方は急いでお降りを願ひます」

若い驛夫が、眞中の通路にまで立つてゐる位一杯になつた車内を、縫うて通つた。

外では、握手を求めに窓際へ寄つて來る群集を制しながら、

「お危なうございますから、お後へ願ひます」

と云つて、又一人通つて行つた。

男は、それでもと、もう一度、いら〳〵とした泣くやうな顏をのぞけて、帽子や蓆

を打振りながら叫んでゐる群集の中を、その眼で引掻き廻した。

（矢張り居ない）

と眼をしばたゝいた時、餘の入つたやうな發車信號のベルが、頭の上で、いきなり齒の浮くやうな音をたてゝ鳴り始めた。男はその音を聞くと、餘りの情なさにかつとなつた。

（畜生め……畜生め……畜生め……）

男は握りつめてゐた鳥打帽を、いきなり窓緣へ思はず二三度力一杯に毆き付けた。

（この騒ぎやうはどうだ……）

鳶色のオーヴァを着た男は、坐る座席が無いためのいら〳〵とした心持を押へながら、苦しい身體を、クションの凭れ木に片手をついて支へて立つてゐた。

彼は、この儘、今夜は立ちつゞけるのかと、不快な氣持にされた。持つて行き處のない忿滿が自分の眼の前で、ぢつと窓緣に嚙り付いてゐる格子縞の鳥打帽を持つた入營者の背を見詰めてゐると一層、怒鳴りつけでもしたいやうな氣がする迄に充じて來るのを感じて、又ダルハムの袋を出して、いら〳〵と粉煙草を卷き始めた。

男は、煙草に火をつけると、ふと、本當に今日は祟られたと云ふやうな、輕い諦めにも似た氣持が湧き上つて來て、ほんの十分ばかり前のプラットフオームでの戀人とのあつけない別れを思ひ浮べた。

「それぢや行つて來るから……」

と自身が噴嚏のやうな乘口を見ながら云つた。

「……」

娘は餘りの激しい混雜に、たゞあつけに取られて返事も出來ないでゐた。

「早く行かないと、席が無くなるから……」

自分はかう云ひ捨てゝ、その儘あの渦卷の中へ飛び込んで了つた。

（あんな別れをしようとは思つてゐなかつたから、屹度あのまゝ沈み込んで歸つた事だらう）

男は、ぢつと窓を離れない見覺えのある入營者の後姿を見詰めてゐると、待合室を出る時からの持つて行きどころの無い反感が、ふと一時にその男に集つて行くやうな氣がした。

ホールの物淋しさに比べて、發車信號のベルの鳴つたばかりの此のプラットフォームは又何んと云ふ騒ぎだらう。殆んど列車の窓毎に入營者が一人づつ首を覗けてゐるらしく、窓下は見る限り見送りの人々が、地引き網にかゝつた鰯のやうに縺れ合ひ跳り

合つてゐる。

町旗が搖れる。山高帽が跳る。別れの酒に醉つた人が怒鳴る。乘客がその人波をくぐつて行かうとする。足を踏まれる。袂が切れる。さうして、それらの叫びが一緒になつて譯の分らないワアと云ふ音になつて聞えて來る。

帽子に金線を入れた驛員たちも、赤線を卷いた驛夫たちも、その人波の後に立つたまゝ、薄赤い電燈の光を浴びて、たゞ苦笑してゐるばかりであつた。

ねんねこの上から子供を押へて、息を切らしながら上つて來たひきつめに結つた女は、この有樣を一眼見ると、たゞ涙組んだ眼をいら〳〵と動かしてゐるばかりで、茫然と其處に立竦んで了つた。

（此の儘、もう顏も見られないで別れて了はねばならぬのか……）

女はその人波に向つて立つてゐると、耳がつうんと鳴り始めたやうな氣がした。

「あの……本當にひと月で歸つて下さる？」
「馬鹿、馬鹿、未だそんな心配をしてる……」
あの待合室で鳶色のオーヴァを着た男が、黒いショウルを掛けた娘の肩に優しく手を掛けてゐる姿が、この瞬間ふと浮んだ。――自分も、ひと月位で會へるのだつたら。
「それでもげんきんなもんだなあ……」
と、不意に強い訛りのある聲で學生帽を被つた青年が女の前を通りながら、嘲笑ふやうに、云つた。
「機關車には、誰もお見送りが無いから妙なもんだなあ。」
相手の白線を卷いた帽子を被つてゐる青年は、それに應じて、大きく笑つた。
女は、それを聞くと、ちらと、機關車の方を何氣なく振向いて見た。
ふと、その人垣の切れた薄暗いプラットフオームの外れを見やつた時に、心の中を

風のやうに通り過ぎたひらめきがあつた。
（それがいゝ……）
と突嗟に、女は急ぎ足に今迄凭れかゝつてゐた地下道への昇降口の眞鍮の欄干を離れた。女は、か細い希望の輝きで、その心を滿たされて、いそ〳〵と人影の少ない貨物昇降機の陰へ歩いて行つた。
「餘り先の方へ行くと危なうございますよ」
横合から、出し抜けに驛夫の聲がしたので、女は自分が云はれたのだと思つて、どきりとした。しかし、すぐ氣が付くと、自分より先のその薄暗い陰に、きまり惡さうに、立止つた人影があつたの自分では無かつたのかと安心して、それでも幾分引け目を感じながら、又盜むやうに歩き出した。
しかし女は、又二三歩その人影に近づくと、再び思はずどきりとして立停つて了つ

た。

成る程、見るとその人影は、二十分程前まで、女の前のソファに、あのオーヴァを着た痛身らしい男と座つて話してゐた今迄淡み通してゐた黒毛糸のショウルを掛けた娘が、何故だらうその眼を涙でうるませて、眼の前の機關車から上る白い湯氣を見詰めて、立像のやうに動かないでゐるのであつたから。

「ぐわ、ぐ〳〵、ぐ〳〵、ぐわア……！」

堰きを破つて流れ出した水のやうに、一時に萬歳の叫喚がプラットフオーム全體に起つた。酒に醉つてゐる人々は、出來るだけのどら聲を張り擧げてわめき立てた。人々の頭の上で、帽子や手が波頭が碎けるやうに跳り狂ひ、その中を、あちらでもこちらでも大きな町旗が押し倒されるやうに搖れ始めた。

發車の笛も汽笛もその騷ぎに氣壓されて聞えないで、知らないうちに、もう汽車は緩やかに動き始めた。

片手に、格子縞の烏打帽を握りしめた男は、窓緣を掴んだまゝぢつと動かなかつた。騷ぎ立てゝゐる人の顏が、その眼の前をすつすつと後へ流れ始めた。

（到頭居なかつた。こん畜生め……）

泣かうにも泣けない情けないやうな腹立たしい心地になつて行つて、何も彼も、妻一人が惡いやうに心の中でのゝしり立てた。

人波がもう絶えたと思つた時、ふと、見た事のあるやうな黒いショウルを掛けた淋しい白い娘の顏がすつと流れた。はつと思ふ次の瞬間に、

「お父ちやまよ。そら〳〵！。ごらん！。お父ちやまよ……」

涙で鼻のつまつたやうなおろ〳〵聲と一緒に、濃黒く見える丸々としたねんねこに

くるまつた女の顔が、二三度左右に激しく搖れながら忽ち流れ去つた。

と、同時に追つかけて來るやうに、赤ん坊の不意に搖り起された鋭い泣聲が一寸の間騷々しい叫びを貫いて聞えた。

餘りに突然で、餘りに瞬間であつたので、男は窓緣につかまつたまゝ、化石したやうに動けなくなつて了つた。たゞ今迄の、自分と自分が、一時に、情けなく、悲しくなりながら……。

列車が、プラットフオームを外れたと思はれる頃から、眼の前の、格子縞の鳥打帽を摑んだ男がたゞ一人未だ嚙り付いてゐる窓から、糠のやうな粉雪が、急に、無遠慮に、冷たい風と一緒にばら〳〵と飛び込み始めた。鳶色のオーヴァの男は、不意に病氣のせいか、その冷たい空氣を吸ふて、妙に胸が絞め付けられるやうにいら痒

くなつて、氣持惡く輕く咳き込み出した。

「こほ、こほ、こほ、こほッ」

男は、はたで聞いてゐると、ごほんと、精一杯咳いたら、どれ位氣持がいゝか、と思はれるやうに咳き續けた。

(早く閉めないかなあ……)

男は、未だむづ痒くこみ上げて來るのをこらへながら、狼狽てオーヴァの襟を立てた。

「おゥ寒い。閉めろ、閉めろ。寒いぢやアねえか!」

不意に誰かしら横の方に立つてゐた者の一人が、荒々しい言葉で怒鳴つた。彼は、苦しい胸をこらへながら、やつと助かつたやうな氣持がした。

窓から、夢中になつて半身をのり出してゐた入營者は、それを聞くと、殿り起され

たやうに飛び上ると、いきなり首を入れて、ばたんと窓ガラスを上げた。

暫時、皆の上に、息苦しく思はれる程の沈默が來た。汽車は、粉雪の中を疾驅してゐるらしく、何時もならば、直ぐ左手に見える筈の「クスリはホシ」と云ふ電燈廣告も、今夜は何處にあるかすらも解らなかつた。

ふと見ると、未だ雪解けの水滴がちか〳〵と輝いてゐる格子縞の鳥打帽を膝の上に置いて、力なく座つたまゝ、入營者は、ぼんやりと次第に室内の蒸氣のために曇つて行く窓ガラスに、砂のやうに斜に打ちつけてゐる粉雪の影を、氣が失せたやうに見詰めてゐた。

しかも、驚いた事には、その眼からは、横から見ても明らかに見える位大粒な涙を、ぽろ〳〵と流してゐた。そしてそれを我慢するためか、その脣は、痙攣るやうに、絶えずぴり〳〵と顫へてゐた。

(おや。泣いてゐるな)

鼠色のオーヴァを着て、未だ咳き込みさうになる胸を押へてゐた男は、ふと、先刻改札口で聞いた會話を思ひ出した。

「おい、××の萬歳を一つやつてやらうぢやねえか」

「俺達のお祝だ、やつてやらう」

「××君、ばんざアいッ!」

「萬歳、萬歳、萬歳、ばんざアいだ」

男は、思ひ出すと、堪らなく眼の前の入營者が哀れに見え始めた。

(あのお見送りで、隨喜の涙か!)

男は、その眞劍な、さめざめとした涙の横顏をぢつと見詰めてゐると、思はずも、その喜劇的な涙に、輕い氣持にされながら苦笑した。

(新兵つて奴は、みんなこんなもんだらうな)

灸

一人娘の四度目の誕生日の祝ひに間に合ふやうにと思つて、商用の方を無理に都合して豫定より二三日早く靜岡をたつた父親が、やつとその日の夕方東京驛へ着くことが出來た。待つてゐるだらうと思つたので、父親は、土產物などをつめたトランクを提げて、狼狽て本郷の家へ急いだ。

うちへ歸つて見ると、細君の姿も、小さな娘の影も見えなかつた。たゞ茶の間にるたらしい老母が皺だらけの顏を生々と笑はせながら父親の歸りを出迎へただけであつた。

「由美子達はどうしましたか」

窮屈な洋服を脫ぎもしないで茶の間へ通ると、いきなり父親はかう老母に話しかけた。

「ほんの今、お風呂へお母さやまと行つたばかり……。みんな今日はお父ちやま

のお歸りを待ち草勞れてゐましたよ」

「ふふふふ……。さうですか」

「ア一寸。――その儘坐らないで、直ぐ着物に着換えたらどうですか」

「ええ、まあ直ぐ後で着換えます。――今日は汽車が込みましてねえ……」

父親は餘り急いだせいか、少し汗ばんで居る額にハンカチを當てながら、妙に落着けないで、神經質的にトランクを引寄せた。

「……それで、手紙で申して置いたやうに、お祝ひの用意に何かしましたでせうか」

「もう今日は朝からそれで大變でしたよ。小豆の御飯をたくやら、海苔卷を作るやら……。さつきやつと御用意がすんでお風呂へ行つたばかりです」

「ふふふふ……。さうですか」

父親は、殆、老母の云ふ事は夢中で聞き捨てながら、引寄せたトランクの中から色々なものを一つ一つ出しては老母の眼の前へ並べ始めた。

「お母さん、今度は、由美子のお土産ばかりですよ。――こいつは、汽車の中で買つたんです」

「あらァ……」

「犬ですよ。しつぽが針金のゼンマイで、生きてるやうに動くでせう。ほら……。それから、こいつはお人形で、手も足も同じやうなゼンマイで、ここに、頭から糸がついてて、ほら……こんな風に踊るやうに見えるでせう。それから、こいつは、セルロイドのお人形……」

「まァ、そんなに澤山買つて大變だつたでせう」

「イヤ、安いんですよ。汽車の中へ賣りに來た奴ですからね。餘り安かつたので、一

寸羞しかつたけれども、由美子が喜ぶだらうと思ひましてね」

「さうですとも、あれがどんなに喜ぶか知れやしないとも」

「ふふふふ……。未だ有るんですよ。ゴムの風船が……」

「――――」

「これが木瓜です。これが飛行船、それから瓢箪。――こんな奴、これがへちまだつて云うんですけど……不細工な格巧ですね。それから丸いのと、皆で五つ……」

「ア、ア、お止し、破れますよ。――でも隨分大きくふくれるもんだねえ」

「お母さん、これで安いんですよ。――エエ皆で五つそろひまして、たゞの十錢……」

「それが十錢ですか。まア……」

「安いでせう。はッはッはッ……」

丁度、この時、表の格子戸が、勢よく開くと、付いてゐる鈴がヤケに搖れて鳴つた。

「歸つて來たんでせう？」

「歸つて來たのかしら。それにしては早いけど。――まあ、何んて亂暴な閉め方だらう」

亂暴に玄關の障子が開いて、湯上りらしく、上氣して眞赤な顏をした細君が、娘を背負つて、息を切らせて茶の間へは入つて來た。背の子供の顏も、一眼見た時には、馬鹿に赤く見えた。

「ほウ……」

良人は、早かつたなあ、と云はうと振り向いたが、それを云はない間に、二人の樣子に吃驚して、後の句が繼げなかつた。細君は、良人の歸つてゐる事にも、又その手に握られてゐる赤や靑や紫の風船にも氣付かないのかと思はれた程顏の筋一つ動かさなかつた。そして、良人の笑ひ顏にも一言の挨拶もしないで、いきなり倒れるやうに蹲むと、同時にどしりと疊を打つ音がして、背の子供が、そこに投げ出されてゐた。

子供は、疊の音と一緒に、蛙を踏み付けたやうな聲をたてると、すぐ火が付いたやうに泣き始めた。子供を投げ出すと、細君は、又いきなり荒々しく立上つて出て行つた。格子戸の鈴が鳴ると、同時に、それまで泣き入つてゐた子供が始めて聲をあげた。

父親の心の中からは、瞬時に、今迄の輕い氣持がケシ飛んで了つた。餘りの不意打ちに、ものが云へなくなつて、身體が動かなかつた。

父親と老母とは、絕え入るやうに倒れたまゝ泣いてゐる子供を前にして、一瞬間、二人とも、蒼い顏を默つてみつめ合つてゐた。

「どうしたんだ？」

やつと、父親が、顫へる聲で、誰にともつかないやうに云つた。

「由美子、おばあちやまにおいで」

老母がさう云つて、手を擴げた。子供は、それを聞くと、不思議な位、ひよこりと

泣き止むと、氣抜けしたやうな顔をして、默つて素直に老母の膝の上へ上つた。

「ほうら……。ふふふふ……」

父親は、何か云つてあやさうと思つたけれども、何んとなく思ふことが云へないで、たゞ無意味に笑ひながら、未だぼんやりと片手に握つてゐた風船を娘の鼻先へ無造作に突き出した。

「由美子はいいのね」

老母が、頰擦りをするやうにしてさう云ふと、子供は顏の肉一つ動かさないで、遠い所をみつめてゐるやうな、涙の一杯たまつて眼をしたまゝ、不意に大きくうなづいた。

出て行つたと思つたら、直ぐ又鈴が鳴つて細君が歸つて來た。

細君が、茶の間へは入つて來ると、子供は老母の膝から、跳び上るやうに離れて、

細君の方へ駈け寄つた。細君は、いきなり右手で娘の胸を突き飛ばした。マッチ箱を轉がすやうに、子供は疊で頭を打つて轉んだ。

老母は父親から風船を受取つたまゝ、まばたきも出來なくなつてゐた。父親は到頭たまらなくなつて上づつた聲を出した。

「どうしたんだ。一體？」

「どうも、かうもッて、今日ッ位、困つたことはありませんわ。―― 本當に今日こそお灸を一つすゑなけりや、ほつて置くとくせになりますから……」

「どうしたんだ。一體？」

「どうも、かうもッて本當に仕樣がないんですもの。―― 妾の方が情なくなつて涙がこぼれましたわ。人樣が多勢ゐる中で萬更ら叱れも出來ず、叱らなけりや、いいことにして、は入れッて云へば、出ようつて云うし、ぢや上らうッて云へば、寒いッて云つ

て蹲んで動きやしないんですもの。妾どんなにしようかと思ひましたわ。――さ、由美子ちやん、今日こそ本當にあつつです、お父ちやまに抑へてゐて戴きますよ。ちやんと、もう、もぐさを買つて來ましたから……」

細君はさう云つて、袂の中から、新聞紙の袋を出して擴げた。中から氣味の惡い色をした、海綿のやうなもぐさが、一掴みも丸めてあるのが出て來た。

良人は、餘り細君の勢が激しいので、今までの細君の亂暴なやり方を叱り付けようと思つてゐた心が、妙に憶病になつて引込んで了つたのを感じた。細君はいきなり子供を引倒すと、着物をまくり上げて、その上へ馬乘りになつた。――一度位、お灸をすえるのも宜いかも知れない。餘り大切にして子供が甘くなつて了つても仕樣がないから、などと心の中で良人は思つてゐた。

「むしのでんは解つてゐますかい」

くせのやうによく涙水を啜り上げる老母も、吃驚したせいか、唾一つ飲み込む音も立てないでゐたが、細君がもぐさをもみかけた時に、おろおろとかう口を出した。

「解つてゐます」

細君はさう云ひながらも、盲人滅法に、もぐさをいんのめあたりへくつ付けようとしてゐた。子供は、餘り泣きすぎたせいか、もう聲は出さないで、咽喉でヒイヒイと云つて、ぜいぜい聲を出しながら、たゞ足をばたばたとさせてゐた。

やつと、もぐさが付くと、細君は線香の火をそれに移した。火は直ぐ吹き付けるやうに、チチチチ……と光りながら、もぐさを傳つて行つた。

今迄夢中になつてゐた細君は、やつともぐさに火がついてから正氣に返つたらしく今更のやうに、線香を片手に持つたまゝ、まぢまぢと子供の背のもぐさをみつめた。良人も、はつとして眼を見張つた。老母は。氣が失せたやうに、眼やにのにぢみ出る

のも拭はないで息を止めてゐた。

こんなに大きなもぐさをつけて、と、良人は思つた。けれども、默つて、火をつけさせた以上、狼狽て消さうと云ふ氣持にもなれなかつた。考へる間もなく、もぐさはくゆつて行つた。事實そのもぐさの大きさは、大人の小指の先程もあつたから……

……。

ほんの一瞬、皆の心の上に、同じやうな切破つまつた感じが明らかに感じられてゐた。

老母は、聲をたてようとしても、咽喉が云ふことをきかないらしかつた。細君自身さへ、危く叫び出さうとした。子供は、最後の宣告を待つやうに、肩で息をしながらも、もう聲は立てなかつた。もぐさは、もう殆灰になつて行つた。

この刹那良人の手が、殆待ちもうけてゐたやうに、勢よくぱちりと、もぐさの上を

平手で打つた。

子供は、ハッとして絕え入るやうな聲をたてた。細君は、音をさせて吐息をした。老母は急に、眼やにを拭つたりし出しながら、初孫をあやし始めた。

その後で、平和な、子供の誕生日を祝ふ晩餐が、賑やかに開かれた。

食後、良人は、明るい二階の自分の室へ上つて行つてタバコを吸つてゐた。妙に心の底へこだはりがあるやうで、好きな講談本も身を入れて讀めなかつた。自分を持てあましたやうな氣持になつてゐる時に、細君が一人で上つて來た。良人はものを云はずに居られなかつた。

「ね、おい……」

「何ですの？」
「あんな事をして打ちどころが悪かつたらどうするんだ？」
「何がですの？」
「由美子さ」
「――――」
「叱るのはいいさ。しかし、あんなにお前のやうに夢中になつて怒つちやいけない。第一若しもの事があつたらどうするんだ」
「ハイ……」
「解らない事は無からう。可愛くつて可愛くつて堪らない子供ぢやないか……」
「解りました……」
良人は思ひもかけず、さう云つてゐるうちに眼の底が熱くなるのを感じた。細君に

もそれが通じたらしく、二人は妙に息苦しい程かたくなつた。――こんな事で泣いたりしちや困る、と思つて良人が氣を換えようとした時に、階段の下から子供が叫び出した。
「お母ちやまア……」
「なあに？」
「わたちのハトポッポは……」
「どのポッポですか」
「ぢやぶぢやぶのポッポ……」
細君はさう云はれると、眼を丸くして、良人の顔を見つめて思はず口ばしつた。
「あ、妾、すつかりお湯のお道具を忘れて來ちやつたわ。――あのね、由美子ちやん一寸あがつてちつちやい」

娘は小さい足音をさせて上つて來た。

「あのね……、お母さやまが、みんな——由美子ちやんのボッボも金とともぢ
やぶぢやぶへ忘れて來ちやつたのよごめんなさいね」

「おばあちやまが、ボッボ頂戴ッて……」

「まあ、おばあちやまが。——あのね、おばあちやまにね、お母ちやまが悪うございましたつて云つて頂戴」

「ウン……」

「ウンではいけません。ハイとおつしやい」

「ハイ……」

子供は無邪氣にさう云つて、くるりと後を向いた。すると、いきなり、今迄片手にかくして持つてゐた青い瓢箪の風船が、小さなお尻の上へだらりとたれ下つてゐるのが見えた。

酔感

不意にそんな事を云つて、叔母さんが迎へに來たのですから、不思議で堪りませんでした。學校が休暇になつて明石へ歸つて以來、叔父さんとは、もう一と月近く、毎日顔を合さない日は無かつたのです。それに、叔父さんは、そんな事は一度も、おくびにだつて出した事はありませんでした。

その叔父さんが、その日、しかもそれが丁度その翌日上京すると云ふ日の夕方、ひよつこりそんな迎へを寄したのですから、まるつきり、雨模樣どころか、カン〳〵と晴れ渡つてゐた青空から、不意に、ザアッと來られたのよりも驚いたのは、私として無理も無かつたのでございます。——

叔父さんと云ふのは、私の死んだ生みの母の弟で、もう四十を三つ四つ越してゐました。十二三の時からお菓子屋へ見習奉公に出されて、四國九州、一度は支那へまでも渡つて、いろいろと苦勞をした揚句、やつと十年近く前に未だ明石が小さな漁師町

の時分に、赤手空拳で小さなお菓子屋を開いて、今ではやうやく動かぬとくい先も出來たので、もう四五年も踏張れば少しは金も出來る——と叔父さんはよく身の上話をしては云ひ云ひしてゐました。叔父さんは酒飲みと云ふのではありませんが、お酒が出鱈目に好きでした。いくら飲んでも大して赤くならない性ですが、それでも二合も一人で飲めば、眼の緣をポッと赧らませて、譯もなく大きな聲をたてて笑つたものです。

遊びらしい事をした事の無い、又あつてもむしろ武骨な方ですから餘りはやり歌などは知らないらしく、醉つた時にも、時折思ひ出したやうに調子外れの詩吟をやつたりする位が關の山でした。若かつた頃は、濃い鬚などもあつて可成り奇麗だつたさうですが、二十歳代に天然痘にかゝつたのださうで、私の知つてゐる叔父さんは、頭の毛の薄い、顏一面にうつすらとそのあとが——きたなく云へば、あばたが殘つてゐるの

です。ところが不思議なもので、かうした事はよくあるものですが、そのあばたが、酔つた時のつるつると皮膚の張り切つた叔父さんの顔に、非常に子供らしい無邪氣な愛嬌をそえてくれるのです。私は叔父さんのその顔が、よくつて好きで堪りませんでした。どんな醜女をお母さんに持つても、その子供は、他所のどんなに美しい女の人よりもやつぱりその醜いお母さんの方が好きで堪らないやうに、私も、叔父さんのその顔が堪らなく好きだつたのです。

私が物心がついてから初めて叔父さんを見たのは、今から六年程前に生みの母が死んだ時でございました。母が息を引取る時その枕邊にゐたのは、私一人でした。父は病院の看護室で、前夜の疲れを醫してゐましたので、跳び起きた時にはもう駄目でした。前夜電報を打つてあつたので、一足違ひで叔父さんが駈けつけてくれました。姉も参りました。もうその時は、私は滅茶苦茶に泣いてゐたものでした。その時、同じ

やうにベッドの上の母の身體に縋りついて何時までも、私と同じやうに泣いてくれたのは、この叔父さん一人きりでございました。

丁度その時、その地方では一番尊敬されてゐたあるお寺のお坊さんも見舞つてくれてゐましたが、私と叔父さんとが、何時までも泣きくづれてゐるのを見て、

「何時まで泣いて見たつて同じです。それより佛には一言の題目の方が却つて供養になります……」

と云ふやうな事を、ひとかど慰めてくれるつもりで云つてくれたのでせう。その時の叔父さんの顔と、その言葉とを、どうして今でも忘れる事ができないでゐます。

「何です。あなたはお坊さんですか。お坊さんが、そんな——そんな解らんことを……

…。自分の親身の姉や、親が死んで、それで泣かずに居れると思ひますか……。解らん——解らんことを……」

叔父さんは、ぬるぬるに濡れたやうな眼を食ひつくやうに開いて、眞青になつてそのお坊さんをみつめました。その眼からは、突き出るやうに涙の粒が湧き出て、薄いあばたのある頬の上をつるりつるり流れてゐました。私はその時まで、そのお坊さんを偉い人だと思ひつめてゐましたけれども、その時だけは、叔父さんの方が、二倍も三倍も偉い人のやうな氣持がしたのでした。初めて會つたのも同じその時から、急に叔父さんが好きで好きで堪らなくなりました。

その後最近になつて、私達一家が明石へ引越して來て住むやうになつてから、母を失つた私と、子供の無い叔父さんとは、直ぐ離れる事の出來ない仲——こんな言葉が可笑しければ、丁度親子のやうな仲になつて了つてゐたのでございます。

ですから、今度冬休みに歸る時にもそれ迄の元氣な、毎日夕方になると近くの波止場へ釣糸を提げて出掛けてゐた叔父さんを胸に描いて樂しみにしたものでした。

「叔父さんがお酒を止したんですよ」

歸つて叔父さんの事をきいた時に、いきなりさう若い母に云はれて私は吃驚して了ひました。叔父さんからお酒を奪つたら、あとに何の樂しみが殘るだらう——とその時私は考へてゐました。身體の弱い叔父さんの事ですから、それに、親身の子供一人無い人ですから、その日その日の樂しみは、お酒より外に何も無かつたのです。その上私にも不思議に思はれた位、叔父さんは女には無關心でございました。飲み仲間と一緒にお茶屋などへ、時折行つても、叔父さんは、本當の飲む一點張りなので、却つて道樂仲間から重寶がられてゐた位でございました。

それが、前から、少しは腎臓が惡かつたのでせうが、急に、今度どつと惡くなつたので、私が歸つてみると、叔父さんは、青くつやの失せた顏をはれぼつたくむくませて、いちにち、薄暗い店の隅に坐つてゐました。咳が出るとかで、煙草も吸はないら

しゆうございました。

私が初めて挨拶に行つても、小さな眼を、少し嬉しさうに輝やかせたぎりで、何時ものやうに、一緒に酒を飲んで祝つてはくれませんでした。

その翌る日も同じやうに默りこくつてるました。淋しいだらうと思つて話しかけて見ても、半年前のやうに元氣よく相手になつてはくれないで、妙に元氣のない小さな眼をうるませて、しんねりむつつりと不幾嫌らしく顏をそむけるのでした。

私は却つてうるさいのだらうと思つたので、その翌る日は叔父さんを訪ねませんでした。すると、その翌日、何か用事があつて叔父さんのうちへ寄つた母が、歸るといきなり、叔父さんのことづけだと前置きをしてこんなことを云ひました。

「叔父さんがね、私の顏を見ると、すぐ、昨日は、なんで俊助は來なんだんやッてきくのよ。だから叔父さんが怒つてらつしやるやうだからッて云つてましたよッて云つ

といたのよ。するとね、怒つたりしとらへんから來いッて……」

私はそれを聞くと、病氣のせいで、不機嫌らしく見える叔父さんの、うはべだけを見て、心の中の淋しさを思はなかつたのが悔いられました。

その日から私は殆一と月の間毎日のやうに叔父さんを訪ねました。少し行きやうがをそいと、ぶら〳〵と叔父さんの方から來たりしました。うちへ來ても餘すつぽものを云ふではなく、たゞ好きなお茶を薄く出させて、默つてそれを飲んで了うと、

「えらい寒いなあ。――遊んどんぢやッたら、ちつとやつて來んか」

さう云つて立上るのでした。私が何とか云つて止めても、氣の無い返事をして、しほしほと歸つて行くのでございます。

叔父さんは、何時行つて見ても小さくなつて火鉢を抱いてるました。私は、その青くむくんだ顏を見てゐると、妙に恐ろしいものが耳のそばへ來ておどし付けてゐるや

うな不安を感じました。毎日、一時間づつ位叔父さんを訪ねてゐましたが、その間中殆、二人とも話をしないでゐました。もともと、私がその冬明石へ歸つて來たのも、それ迄仲間でやつてゐた同人雜誌に發表した小說が、どれもこれも、誰一人をも動かすことが出來なかつたのと、不自由な學資とで、全く自分の腕に失望してゐた上に、苦しい生活に我慢が出來なくなつたので、東京を逃げ出して來てゐたのですから、もう堪らなくやり切れないやうな暗い氣持になつてゐたのでございます。その上、一方では、半年見ない間にがらりと變つて了つた叔父さんの沈み込んだ氣持が手傳つて、どうしても愉快な顏を義理にも出來ないやうな氣持になつて了つてゐたのです。

お酒から離れなければならなくなつて了つてからの叔父さんは、よくまああれ程好きであつた人が、こんなに辛抱が出來ることだ――と思はれる位、欲しさうな素振りは毛ほども見せませんでした。

「此頃はどう。――本當に欲しいたァ思はない」

夕飯時分に行つた時、叔父さんが淋しさうにぽつりだけをかき込んでゐるのを見て、こんな風に一寸冗談めかしてきいて見たこともありました。

「いんにや。もうてんと大丈夫や。それよりお前は本眞にどうしたんや、近頃元氣のない顏をして……。ウヰスキーでも買うたろか。ちつと酒でも飲んで元氣出し」

叔父さんは、さうあうむ返しに云つて、私の顏に、その小さい妙にうるんで見える眼をぢつと据えるのでございます。その時、私は、自分の何氣なく叔父さんを痛々しく思ふ氣持が、鋭くなつてゐる叔父さんの神經にでもさはつたのかと、はつとしたものでした。……が、後になつて解つたことですが、これは、却つて私の考へ違ひであつたらしいのでございます。

その叔父さんが、ひよつこりそんな事を云つて叔母さんを迎へに寄したのですから

私の吃驚したのも無理では無かつたでせう。その日は、又上京する前日だつたので、色々の支度に忙しかつたのです。―― 洗濯して貰つたシャツや、縫ひ直した着物を行李につめたり、それにそれ迄東京では、足駄も雨傘も無かつたのでさうしたものを買ひとゝのへに行つたりと云ふ風に、仲々忙しかつたので、つい叔父さんの店を訪ねるのを忘れて了つてゐたのです。すると、やつと用意もとゝのつて、夕飯をたべてゐる時、叔母さんがやつて來ました。

「あのう、今夜おつさんがお別れをするよつてに、すぐ來とくなはれ――と」

叔母さんは、私の顏を見ると、餘り氣の進まないやうな顏をしてさう云ひました。

「お別れつて、もうごはんすんだがな」

「ごはんすんでもよろし。―― たいがいお酒飲むんでッしやろ」

「へ――ン」

私はお著を持つたまゝ吃驚したやうな顏をしました。しばらくものが云へません。

「本當ですか」

「嘘ひまッか。わざわざお迎へに來てあげてんないか」

「それもそやな」

「ハアアア。―― お禮でも云ひんか。この寒いのんに」

私は、何時ものやうにはしやいだ若い叔母さんの言葉にふき出しながら、箸を置いて立上りました。さうして急いで着を着換えて、襟卷きをしたり、マントを羽織つたりしながら、腹の中でしきりに考へてゐました。

（お酒をのむ。―― あの叔父さんが。さけのサの字も云はなくなつてゐたあの叔父さんが……？）

そして、支度が出來ると、待つてゐた叔母さんと一緒に外へ出ました。

「又牛肉でも煮たの」
「いいや。――おつさん今晩、ええとこ連れて行く云ふとオ……」
「ええとこ云うてどこや」
「丸萬や」
「へ――ン」
私達はそんなことを話しながら、目抜きの町を通つて行きました。眼にしむやうな星が、キラ〳〵と頭の上で顫へてゐるやうに見えます。私はマントの上から自分を抱くやうに縮み上りながら、矢張り考へ込んで小刻みに歩いてゐました。
(丸萬か。――お茶屋へ行くんだ。小さくつても……)
久しぶりに叔父さんの元氣な顏が見えると思ふのと、小さいながらお茶屋でお酒をのむと云ふこととが、すつかり私を宇頂天にして了ひました。そして、つい少し前迄

頭の底にこびりついてゐた考へ――若しやお酒をのんだりして病氣が惡くなつたら、と云ふやうなことは、知らぬ間に心の中からけし飛んで了つてゐました。
私のうちから叔父さんの店までは僅二丁ばかりの間なので、夢中になつてそんな事を考へてゐるうちに、もう私達は所狹いまでにごたごたと菓子瓶や箱などのならべ立ててある店の前迄來てゐました。ふと見ると、叔父さんはもうすつかり着物を着換えて、それ迄の一と月の間に一度も見た事の無かつた位のはればれとした顏色をして、ぢつと待ちこがれてゐたやうな眼をしてこちらを見ながら、店火鉢を抱へ込んでゐるのでした。
「來たよ」
「來ましたぜ、來ましたぜ。――おつさん今晩は俊助はんを待つて、待つて……。この元氣な顏を見てやつとオ」

私達は、叔父さんの何時に無い明るい顏色を喜ぶ氣持で、叔父さんの顏を見ると、いきなりこんな風にはしやいで見ずにはゐられなかつたのです。叔父さんは、にこにこと笑ひながら、默つたまゝ立上りました。

「行かう」

ぶつきらぼうにさう云つて店を出ましたが、その言葉のぞんざいなのに似ず、不思議に暖い氣持がその言葉からこぼれるやうに響いて參りました。

私達は、半年前の氣持に一足飛びに立歸つたやうな氣がして、寒い風の吹く中を、それでも暖い心持で肩をならべながら、海岸の丸萬の方へ歩いて行つたのでございます。夏なら、涼み客がぞろぞろと通つてゐる筈のその海岸の道も、そんな眞冬の夜には人ッ子一人通つてゐませんでした。處々にしよんぼりと立つてゐる電燈の柱の上でゆるくなつたたまが、ゆらゆらとかぶりを振つたりしてゐました。

丸萬はこの淋しい海岸の海風が眞正面からぶつかる處にある小料理屋なのです。夏は大變なお客ですが、さうした冬の日にも、魚のいきがいいので、ぽつりぽつりではありましたが、お客があるらしゆうございました。

「おいで……」

私達がは入つて行くと、二十二三の、にきびのぽつぽつとあるのをかくすやうにお白粉を塗りたくつた仲居が、甘つたるい眼をしてちらと私の方を見ながら、(久しぶり)と云ふやうな調子で叔父さんを迎へました。

「お前まだ生きとつたか」

「可哀さうな事云ふたりなはんな……。年が遠ひまつせ」

「にくまれ子は世にはゞかる。お前みたいなもんとつとと行たらええ。――遠慮せん

「えけつないことばつかり云ふ人や。これでも花なら蕾……」

「阿呆！　今日はいらんこと云ふな」

私があつけにとられてゐる間に、二人はこんな風なことを云ひながら、ずんずんと二階へ上つて行くのです。私は叔父さんの生れ變つたやうな浮き浮きした調子に少々面喰つて了ひながら、夢のやうな氣持で階段を上つて行きました。

二階の部屋で、食卓の上へかつかとなつた火鉢をのせて、差向ひになりながら、私と叔父さんと二人きりでお酒と肴とが來るのを待つてゐました。部屋の外で硝子戸がしきりに鳴つてゐました。沖の方で、時折、お臍のあたりが擽つたくなるやうな汽笛が突拍子に鳴り渡つたりします。叔父さんは、自分一人で嬉しいことを考へてゐるやうに、その小さな眼を忙しさうにまたゝきながら私の方を見つめてゐましたが、突然袂の中から小さな箱を取り出しました。

「まあこれでも吸ひ」

見るとそれは金口煙草なのです。私は、思はずぽかんと食卓の上に置かれたその小箱をみつめました。

「吸ひ。――　昨日かしらんも、金口がほし、ほし云うとつたやないか」

叔父さんの云ふ通りでした。前の日、叔母さんが、煙草ッておいしいものか――と云ふやうな事を私にきいた時、金口程うまいものはない、金口を一本吸ふと壽命が一日のびる――と云ふやうな返事をしたことがありました。それを、叔父さんは、何氣ない風に店火鉢に凭れて聞いてゐたのでせう。

私は默つて手を出しました。何とか云はうとしたのですが、何も云へなかつたのでございます。

間もなくお酒が來ました。私は父に似てかお酒には弱くて、猪口に三杯も飲めばも

うカッと赤くなつて來るのです。赤くなつても、二合や三合――叔父さんの相手は出來る位は飲んでも平氣でしたので、その時も、勸められるまゝに盃を重ねました。

「東京へ行たら飲むなよ。その代り、今晩はうんと飲んどいてくれ。東京へ行ても、もうほしゆうない位のんどき」

叔父さんはさう云つて、半年前にしたやうに「ハッハハハ――」と大聲に笑ふのでした。

「この方東京へ行きなはるんだつか！」

「そや」

「羨ましなア。一寸袂の中へ入れて行てもらオ」

「コラコラッ！あかん。お前みたいなもん、この子の側へよつたらあかん」

「そんな事云うてかた、年頃になると虫がつきまッせ」

「阿呆！この子はな、そんな子と違ふんや。他所の子みたいに金があつて東京へ行くんやないんや。お前みたいな阿呆でも、そんな事云はずに、同情したり」

「へ、そら同情してますがいな。えらしや」

「フン、そらわしが惡かつた。お前みたいなもんが同情してくれても、何にもならんのやつた。……そやつた。同情は同情でも世間がしてくれとなア……」

ぢつと片手に盃を持つたまゝ、飲みほす氣も無くなつて。二人がそんな事を云ふのをぢつと聞いてうなだれてゐた私を、突然。叔父さんは「ナア、そやろ……」と云ひながら振り向いたのです。私はもうその時には、可成り醉つてゐたせいか、不意に叔父さんにさう云はれると、返事が出來ませんでした。うつかりしようとすると、却つて、涙の方が先に飛び出しさうな氣がしましたから……。

「あアあ、又考へ込んどる」

叔父さんは、私が返事をしないのを見ると、いきなりかう云つてガツカリしました。妙に言葉がねち〳〵して來たところから考へると、大分醉つて來てゐるな――と私は思つたので、そつと顏をあげて見ました。すると、思つた通り、眼の光が、變に鈍つて來てゐるではありませんか。

（到頭本當に醉つたな）

私はこんな事を考へて、ほんの暫時默つてゐました。すると、叔父さんは、私が叔父さんの言葉を氣にして沈み込んだのだと思つたのでせう、濟まない顏付をして、急に默り込んで、食卓の上の金口の箱をぢつとみつめてゐるのです。又、仲居は仲居で初めのうちはバツを合してゐたのが、次第に話が妙な風にそれて了つたので、どう口を入れていいやら解らないらしく、同じやうに銚子を兩手に抱いて、ぼんやりと坐つてゐるではありませんか。で、私は、急に堪らなく淋しい氣持に引ずり込まれて了ひ

ました。――今考へて見れば、私も可成り醉ツぱらつてゐたのに相違ありません。

「おい、もう二三本あつうして持つて來てくれ。ゆつくりしてもええからなあ」

不意を顏を上げると同時に、叔父さんはさう云ひました。私はハツとしました。

「もういい事ア無い。餘り飲んぢや、又身體に毒ですよ」

立ち上りかけた仲居は、又一寸腰を据えさうな格巧をしました。

「大事ない。――坐つたりせんかてええ」

叔父さんが、さうつつけんどんに云つたので、仲居はよい機會（しほ）だと云ふ風に立つて了ひました。二人きりになると叔父さんは妙な手付をして金口を撮ひました。それから、一つ深い息をすると、重たい聲で云ふのです。

「わしは、どんな事があつてもお前を信用しとるんぢやからなア。――辛抱して是非えらいもんになつてくれんとあかん。本眞にお前でもえらうなつてくれんと、うちの

家が馬鹿にせられるばつかりやから……」

叔父さんはそれから、くどくどしい口振りで、兄弟に誰一人これと云ふ人間のゐないことやら、十六年も前に姉むこに馬鹿扱ひにされて今日まで未だ一度も會はずにゐることやらを、繰り返しては話すのでございます。もうその時には、私達は二人とも妙に感傷的になるまでに醉つぱらつて了つてゐました。

「人間は意地が大切や、このおつさんでも、十六年前に云はれたことを、いまだに忘れずにをる。――なアに糞ッと思やこそ、かうして面白うもない仕事をしとるんや。今に見ろ！この今に見ろッちゆう元氣が無かつたら人間は駄目や」

こんな事を云つてゐた叔父さんは、自分で自分の言葉にッィ吊り込まれたらしく、聲まで顫はしてゐるのでございます。私はたゞ默つて聞いてゐました。

（解つてる。よく解つてる……）

餘り同じ事をしちくどく云はれるので、ついそんな風にうるさく思つても見ましたが、しかし矢張り、叔父さんの、その思ひ入つた言葉をきいてゐると、（今に見ろ！）と思はずにはゐられなくなるのでした。

「それに、此頃はどうしたんや。ちよつともお前は元氣あらへんやないか。半年程前のお前は、もう少し元氣やつたが……。意氣があつた。あの意氣はどないにしたんや」

叔父さんは不意に今度はこんな風に私をせめ始めました。

（叔父さんが變つてゐるからだ。叔父さんに半年前の元氣が無くなつてゐるからだ）

私の心の中でこんな云ひ譯をしてゐました。私が默つてゐると、叔父さんは、醉つて、むしろ青くなつたやうな、それでゐて眼だけが血走つてゐるすごい顏をしながら食卓の向ふから自分の首を延して、私の顏を近々とみつめながら、これだけは云はねばならないと云ふ風に、云ひつづけるのでした。

「半年前に歸つて來とつた時にや、お前は、よう大けな聲で歌うたもんや、さうかと思ふと、『千圓落ちとらんか、千圓落ちとらんか』云うて、あんな大通りを歩き廻つたりしたやないか。そいから、『バン』やら云ふ活動寫眞を見に行た時にや、歸りみちで電信柱に抱きついて、オイ〳〵云うて泣いたりしたやないか。わしは、あれが好きや他人はどない云うても介はん。人間は意氣や。あの意氣や。わしはお前がどないな事したつて怒らんで——お酒のんだかて、女の一人やこしらへたかて。そんなこた介はん。お前がこの意氣さへ持つとつてくれたらええんぢや、どうや……」

私はじつと叔父さんの云ふことを聞いてゐるうちに、初めは叔父さんは、これを云ふために、今夜お別れに一杯のみに連れて來たのか——とも思つたし、又、たゞ醉つたまぎれに出て來たくだかしら——などとも考へてゐたものでしたっところが、叔父さんの聲が次第に涙で濕み、しまひには、その血走つた眼から、大粒な涙がほろ〳〵と落

ちるのを見ると、私は胸がカアッと熱くなつて來たやうな氣持がしました。と思ふともう何もかもが、ボヤッとして、見えなくなつて了つたのです。最後の「どうや……」と云ふ言葉が、その私の滅茶苦茶な醉感にぐつと觸れました。その突嗟に、私はその氣持をどうにかするために思はず妙な風に手を振りながら、大きな聲で、

「今に見ろッ！」

といきなり怒鳴りました。かう怒鳴つて了うと、胸がスイッとしたやうな氣持がして、その儘、ずきりずきりとする頭を食卓の隅にぐたりと俯せて了ひました——後になつて考へて見ても、あの時、どうしてあんな聲をたてる氣になつたのか、それは今だに解らないでゐます。

そんな聲をたてていきなり苦しまぎれに俯伏しになつて了つたのですから、叔父さんがどんな顏をしたのか、それはさつぱり解りません。が、私がうなだれて眠つたや

うな格巧になつてゐると間もなく階段を上る音がして、仲居がは入つて來たやうでした。

「どないしなはつてん。――今の大けな聲……」

「何でもないねん」

「あらあら、もう醉ひつぶれなはつてん？」

「そやない」

「どう……？」

「もう睡むいんや」

「ホレホレ」

私はぢつと突伏したまゝ、二人の話をきいてゐました。叔父さんは、まだお酒をのんでゐるらしいのです。飲みなれないお酒をのみ過したので、頭がぐらぐらとして、

うつかりすると、本當に睡りさうな氣がしだしました。

「あら、これのみのあとかしらん？」

お酌をしてゐたらしい仲居が突然そんな事を云つたと思ふと、いきなり食卓の上に投げ出してゐた私の右手を握りました。

「のみやな」

「のみでつしやろ？」

「ウン……」

叔父さんが今度は私の右手を掴みました。そして、その赤くなつてゐるらしいところを人指し指で爪跡をつけながら云ひます。

「可愛さうに、のみにも食はさんやうに大切にしてた息子が、たうとうのみに食はれてしもたがな……」

さう云ふと二人で可笑しさうに笑ひ出しました。叔父さんはあの「アッハハハ――」と云ふ大きな聲で。食卓の上に俯伏して眠つたふりをしてゐた私も、叔父さんのその笑ひ聲につられて、思はず忍び笑ひをしました。しかも、何時の間にか、酒くさい食卓の上が涙でベト〳〵にぬたくり廻されて了つてゐるのにも氣付かないで……。

大正十三年九月十日印刷
大正十三年九月十五日發行

（定價一圓四十錢）

屏風物語

著作者　加宮貴一
發行者　東京市四谷區新宿一丁目五十一　足立欽一
發行所　東京市四谷區新宿一丁目五十一　聚芳閣　電話四谷五十一番　振替東京五六一四七番
印刷者　東京市神田區表猿樂町二番地　田中常太郎
印刷所　誠社印刷

529
151

終